のつながりなどについて話された。

その後、地域住民とNPO法人との相互理解のためのコミュニケーションの時間が設けられ、さまざまな疑問や思いなどが活発に話し合われた。

同講座の総括として、センター職員は、活動の形態は違っていても同じ「地域愛」でつながっていることが大切な視点である。地域に「保水力」があると、さまざまな団体とつながり、活動も広がり、それが地域の「強み」になると語った。

に計8カ所で開催した。

共催は、旭区地域包括支援センター、旭区西部地域包括支援センター、旭区東部地域包括支援センター。

今年度最終となった同学習会は1月28日、古市地域の住民を対象に、古市会館でおこなわれた。

前半では、井口診療所の井口和彦医師（旭区医師会会長）による講習がおこなわれた＝写真。

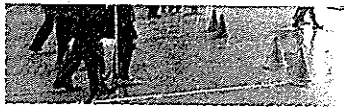
井口医師は、同区の高齢者数が市内24区で3番目に多いことに触れ、認知症の診断件数のうち、8～9割は診断が遅いことを指摘。認知症ではなくても不安や疑いがあれば、早期の診断を勧めた。

また、地域のなかで、認知症の疑いがある人を放置することの危険性や認知症を認めたくない独居高齢者についても言及し、地域における認知症の早期発見の重要性を説いた。

後半では、地域包括支援センター（以下、包括支援センター）の職員による認知症に関する啓発の寸劇がおこなわれた。

最後に、地域での認知症に関する相談を、身近なネットワーク推進員などにすることで、包括支援センターにつながり、かかりつけ医や専門医の紹介・介護保険のサービス利用など、早期に対応することが可能であることなどを説明した。

旭区では今後も、医師会と包括支援センターなどとの協働体制（認知症高齢者支援ネットワーク連絡会「あさひほっとかんネット」など）により、高齢者支援・課題解決などの取り組みを進めていく予定である。



そのほか、区社協では、東日本大震災復興支援を継続しておこなっています。震災後のボランティアバスの運行や被災地から当事者を招いてのフ、区民まつりやオオサカイベントでの東北物産展です。また、この3月にはにエールを送ろう」と住2会場で音楽の同時演こない、ユーストリーム災された東北の方々に発予定しています。

区社協では、さまざまなかして活動を進めていきいます。

住吉区社会福祉協議会）

大阪市シカゴ市（姉妹都市）社会事業従事者研修交流プログラム（2012.11.10~18）参加レポート③

日本と違った社会問題を改めて痛感

今回の研修は、私にとっての初めての海外でしたので、緊張と不安のなかでの出発でしたが、シカゴでの関係者の皆さま、同研修生の方々に温かく迎えていただき、さまざまなことを見聞きし、感じることのできた充実した9日間になりました。

シカゴでは日本とはまた違った問題の大きさを痛感しました。どこで話を伺っても「貧困」「薬物問題」「犯罪」といった生活を揺るがす大きな問題があり、それにともない毎日の衣食住の必要性、子どもを取り巻く環境などシカゴの社会的問題を感じることになりました。

また、私は障がい分野の施設を訪問。シカゴでは障がいがある方は義務教育後も22歳の誕生日まで教育を受ける権利があるそうです。しかし、その後のサポートの選択肢が少ないため難しく、いかにその年齢までに自立生活や就職に向けての訓練、指導が必要かが重要になっています。今回訪問した施設（職業訓練学校）でも、一人ひとりの特性に合わせたプログラムが組まれており、自立や就職に向けてがんばっている生徒がたくさんいるなか、年齢に達したときに就職先がなく、家にいる方が多い現状にもどかしさを感じました。日本でも障がい者を取り巻く環境はまだまだ課題はありますが、シカゴでは障がい者が地域で過ごすことに治安の問題などもうひとつ大きなハードルがあるように思いました。

その中でも最後に訪問した施設（アクセスリビング）では、地域での障がい者の環境、生活、社会的地位を確立するため、活動している障がい当事者の力強さを感じました。代表の方が話された〝Change the World〟という言葉が印象に残りました。

その他、シカゴでは各職種の高い専門性のなか、互いの地位を確立しており、誇りを持ってチームでの質の高い支援をおこなっている印象がありました。私も自分たちの仕事に誇りを持っておこなえるように改めて考える機会になりました。

今回の研修で異文化に触れ、現地の状況を見聞きし、同じ社会福祉関係に従事する方々と交流したことは、改めて今の自分の仕事を振り返り、日本とアメリカの共通点や相違点についても考えることができた、とても貴重な経験になりました。

最後になりましたが、今回の研修で大変お世話になった大阪市・シカゴ市の双方の関係者の皆さまに本当に感謝申しあげます。今後も両市がこのようなすばらしい交流を続けていけるよう強く願い、今の自分の仕事や利用者と向き合い、精一杯力を注ぐことで、微力ながらその一端を担っていけたらと思います。

社会福祉法人　ゆうのゆうデーセンター機関車

中　祐子

シカゴ公立学校南部職業訓練専門高等学校の生徒さんから手作りのちぎり絵を贈られた

「大阪の社会福祉」（大阪市社会福祉協議会）３月号
スタッフ・中さんのシカゴ研修のレポートが掲載されています。